

衣生活教材における小学校家庭科授業の検討 — 日常生活での技能の活用を目指す指導過程 (2) —

平野 江美*・榊原 典子

Examination of Clothing Teaching Resources in Elementary School Home Economics Classes:
An Instruction Process Aimed at Utilization of Skills in Everyday Life (2)

Emi HIRANO* and Noriko SAKAKIBARA

Accepted July 20, 2012

抄録: 本稿では、学習した技能を日常生活の中で転換するため、特に衣生活の作品製作では、子どもたちの関心・意欲を高め、活用する力を高める工夫が必要なのではないかという仮説について授業実践を通して検討を行った。授業では、技能の活用を取り入れた製作題材を設定し、関心・意欲を高め、技能の定着ならびに技能の活用機会を目指した指導過程を構想し実践した結果、児童の学びに成果がみられたので報告する。

索引語: 小学校家庭科, 衣生活教材, 技能の活用, 指導過程

Abstract : In this report, in order to convert learned skills into skills for daily life, particularly those involved in making of clothing, we examined the need for an increase in the interest and motivation of children, and in their ability to use the skills in everyday life. In the class we arranged product materials appropriate for the utilization of skills, and designed and executed an instruction process aimed at utilization and fixation of those skills, and give, in this report, the observed results of the children's learning.

Key Words : elementary school home economics, clothing teaching resources, utilization of skills, instruction process

* 宇治市立宇治小学校 (投稿申請時点, 附属京都小学校)

1. はじめに

家庭科学習で身につける様々な基礎的・基本的な技能は、日常生活に転換され、生かされるべきものである。しかし、平成 10（1998）年改訂の小学校学習指導要領からは、家庭科の指導時数が削減され実習にかけられる時間が減少する中、衣生活教材の製作題材の指定もなくなった。一方で、家庭生活における子ども達の生活技能の低下は前稿¹⁾で述べたとおりであり、特に衣生活の製作にかかわる技能については課題が多い。このような生活技能の定着にかかわる厳しい教育環境の状況を背景に、衣生活の製作については、教育的意義の見直し²⁾や子どもの学びの実態把握³⁾、また短時間でできる教材の開発⁴⁾などが盛んに行われている。しかし、技能の定着にかかわる課題を整理した上で、技能の活用を目指す学習指導について実践的に検討した研究はほとんど見当たらない。

そこで、本研究では、前稿によって小学校家庭科で身につけるべきとされている技能について、定着しないと考えられる要因を仮説として設定し、小学生ならびに同じ教育課程で小学校家庭科を学んだ大学生を対象としたアンケート調査により技能の定着と活用に関する課題を明らかにした。本稿では、製作題材および指導過程にこれらの課題を克服するための工夫を取り入れることで、日常生活に活用できる技能の育成について検討したので報告する。

2. 仮説と指導過程の構想について

2.1 仮説の設定と題材設定

本研究において、仮説を 2 つ立てた。そのうち 1 つ目の仮説「家庭科について子どもたちは、教科学習としての知識は身につけているが、実生活で活用するためには関心・意欲、技能、活用する機会の 3 つの要素が十分でないために、学習の成果が日常生活へ十分に転換されないのではないか」という点については前稿で学習時の関心・意欲はあるものの、技能の定着や学んだ技能を活用する機会が特に衣生活領域には少ないことがわかった。本稿ではその上で、2 つ目の仮説である「衣生活の作品製作では、学習した技能を日常生活に転換するため、関心・意欲を高め、活用できる力が必要なのではないか」について授業実践をもとに立証していく。

その際、技能面、関心・意欲、活用できる力（活用の機会）にわけて考察を行うものとする。それぞれについては次のように考える。

①技能について

製作において、見通しを持たせて作業をさせることは、基礎・基本を土台としながらも、目的に応じた縫い方の工夫をさせることで、技能の定着につながるのではないかと考える。

②関心・意欲について

製作材料や題材などについて、学習者により自己決定・選択できる場面を設けることで、学習者自身が学習に対して関心を高め、製作に対する意欲をより持つのではないかと考える。

③活用について

製作材料を指導者が全て与え、真新しい材料で作るのではなく、すでにある製品を加工することで、別の用途に変えたりより自分好みにしたりすることにより、作品に対する思いが高まり、使用することにつながるのではないかと考える。それが今後の日常生活における技能の活用につながるのでは

はないか。

授業実践にあたっては、まず教材の検討から行う。製作過程に基礎縫いの要素ができるだけ多く取り入れられること、完成した作品を日常生活で使用できるもの、という 2 つの観点から教材を絞り込むこととする。

2.2 衣生活教材について

衣生活教材は、小学校家庭科で学習する玉結び、玉どめ、ボタンつけ、なみ縫い、返し縫い、ミシンによる直線縫いなどの要素が複数取り入れられていることが必要である。

特に第 5 学年で取り上げる基礎的な教材では全員が同じ作品を製作することで作業の見通しのもち方を学び、学習した技術の習得と技能の定着を目指す必要がある。このように技術の定着と使い方がまだ十分でない場合は、全員が同じ作品を完成させることにより技能の定着をはかることが望ましい。

ある程度の技能の定着が見込まれるようになると、次の教材には、それまでに学習した技術のうち、自分の必要に応じて選択して使えるような要素が必要である。ここでは学習者自身が自分の作品の状態や自身の技能の定着に応じて使用できる技術を選択して活用することが望まれる必要がある。使用することで技能の定着がはかられたりさらに高度な技術を増やしたりすることができる。

今回取り上げた 1 つ目の教材であるあづま袋と 2 つ目の教材である不用品を活用した作品は、使用する目的や自分の技能の習得状況を考えて縫製の方法や適用について考えることができる題材である。それぞれの特徴は以下の通りである。

(1) あづま袋

あづま袋は、図 1 のようにバンダナを対角線で裁断し、切り取った三角形の布 2 枚を重ね合わせて縫製して作成する袋物である。その製作過程では既習の基礎縫いやミシン縫いの要素を組み入れることができる。必ず縫い合わさなければならない部分は底の直線部分で、ここは 4 枚の布が重なっている。この部分では、これまでに学習した縫い方の中から丈夫でもっとも適する縫い方を自分で選択することが必要になってくる。そのほか、入れた物が

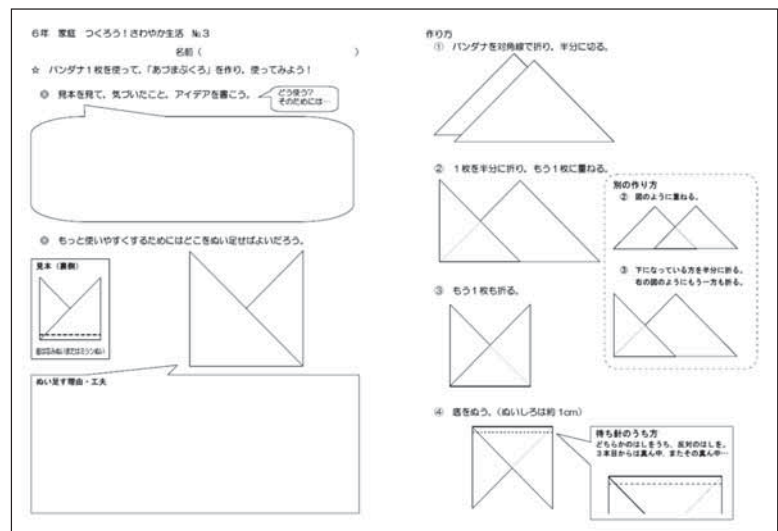


図1 あづま袋の作り方

が落ちないようにするためには 2 枚が重なっている部分も縫い止める必要がある。縫い止め方によって外側または内側にポケットができたり、全て縫い止めることでポケットをなくしたりすることができる。ここでも縫い方の選択ができる。また、児童の必要度に応じてボタンをつけることができるなど、材料は同じでも、学習者の工夫によって多様な作品に仕上げるができる。

共通の用布としたバンダナ（ハンカチ）は児童にとって身近な素材であり、家庭においても必ずあ

る物の一つである。児童が自分たちでもう一度製作しようと思えば比較的簡単に組み組める題材であるため、自発的に 2 つ目の作品を作ろうという意識につなげることができる考えた。また、完成後の作品についても、身近な場面において日常的に使用することができる手頃な大きさと素材である。

このような作品の特徴から、今回の仮説における「学習した技能」を学習者が自己決定しながら使用できる題材であると判断し、導入することとした。

(2) 不用品を活用した作品

衣生活教材で作品に使用される「不用品」には 2 つの種類がある。

1 つは、衣服として使用されていた縫製品の一部または全てを活用して新たな作品に作りかえるものである。リフォームやリメイクなどと呼ばれている。元の形を利用した場合、作れる作品の形には制限が生じるが、縫製された部分を利用することで、布端の処理が不要となったり自分で縫製する部分を減らしたりすることができる。

もう 1 つは、家庭で布の状態でおかれている「端布^{はぎれ}」と呼ばれる布である。製品ではないため、布端の処理が必要となる場合があるが、ある程度の大きさがあれば製作者が意図する作品に加工することが可能である。

今回は家庭で不要となった布としてそのどちらかを利用して作品を作成させることにした。布製品を加工することに限定しなかったのは材料を提供する家庭の事情も考慮したためである。

いずれの場合も、あづま袋同様、今までの学習で身につけた技能を使って新しいものに加工することが可能であることから作品作りの材料に取り上げたものである。

作品の製作に当たっては、家庭科通信を通して家庭への協力を依頼した。家庭からの協力や作品に対する期待が、製作に対する児童への関心・意欲を高めるとともに、積極的な技能の活用の機会を作ると考えたからである。

2.3 題材と指導計画について

今回取り上げたあづま袋と不用品を活用した作品づくりは、いずれも年間指導計画に位置付けた 2 つの題材の中の小題材の 1 つとして組み入れている。

(1) あづま袋

題材名：「つくろう！さわやか生活」（『新しい家庭 5・6』東京書籍 2005 年版²⁾）

指導時数：12 時間中の 5 時間（8～12 時間目）（表 1）

「生活に役立つ物を作ろう」の小題材として位置付けた。

表 1 あづま袋学習指導計画

次	時間	指導内容
1	1	あづま袋の製作について知る。製作計画を立てる。
2	3	あづま袋を製作する。（連続した 2 時間と 1 時間）
3	1	製作の振り返りと作品の交流

(2) 不用品を活用した作品

題材名：「工夫しよう 季節にあうくらし」（『新しい家庭 5・6』東京書籍 2005 年版³⁾）

指導時数：10 時間中の 4 時間（7～10 時間目）（表 2）

「季節にあうくらし」の一環として衣替えから生じる布製品の不用品をテーマに取り上げた。

表 2 不用品を活用した作品 学習指導計画

次	時間	指導内容
1	1	持参した材料の特徴をとらえ、製作計画を立てる。
2	2	作品を製作する。(連続した 2 時間)
3	1	製作の振り返りと作品の交流

3. 授業実践

3.1 実施対象について

実施対象：2011 年度京都教育大学附属京都小中学校 第 6 学年児童 計 88 名

なお、本児童は、前稿で行ったアンケート調査対象の第 5 学年児童である。衣生活に関する学習の履歴は次の通りである。

まず第 5 学年では、6 月ごろに市販の運針布を使用して基礎縫いの学習を行っている。学習した技術は玉結び・玉どめ・名前の縫い取り・ボタンつけ（2 つ穴・4 つ穴・足つき）・なみ縫い・返し縫い（本返し縫い・半返し縫い）である。その後、手縫いによりポケットティッシュケースを作り、さらにミシンを使ってナップザックを作成している。しかし、完成させた作品を学校生活の場で見かけることは少なかった。ナップザックについては第 6 学年で実施する修学旅行で使用するため、それまで保管しなくてはならないととらえ、使用せずにいたようである。

第 6 学年に入ってから、食に関する学習を先行して実施していたため、衣生活に関する学習は行っていない。よって今回の対象児童が身につけている技術は、第 5 学年での家庭科学習によるものと家庭経験によって身につけているものである。なお指導教員は第 5・6 学年いずれも家庭科の教科担任で、第 6 学年の教科担任は筆者自身である。

3.2 あづま袋

(1) 実施時期 2011（平成 23）年 6 月

(2) 学習の展開

本題材の指導の概要は次の通りである。

第 1 次ではまず、作品の例示から始めた。底だけを縫った作品について手縫いとミシン縫いの 2 種類を提示した。その上で紙による試作も取り入れながら作品の計画を立てた。この場面では見本の作品を見たり友だちと相談したりしながら作成する様子が見られた。

第 2 次は作品の製作である。2 時間連続と 1 週間後に単独で 1 時間の合計 3 時間をあてた。製作の支援として、教科書の基礎縫いの掲載ページを用いて方法の確認を行った。また児童にとってより必要な縫い方を選択できるよう、前時に提示した見本と 4 つ穴ボタンのつけ方を示した模型とかがり縫いの縫い方を提示した。製作中は互いに相談したり見本を見てより自分に使いやすい状態を作り出そう

としたりする姿が見られた。

最後に 1 時間でクラス内の作品の交流と自身の活動に対する振り返りを行わせた。交流の方法の 1 つとして、グループ内でデジタルカメラにより作品を持った級友の写真を撮り合わせた。写真を撮りあうことで、互いの作品を見合い、その良さに気づきあえると考えたためである。合わせて、作品製作における学習者の意識を見るためにワークシートによる振り返りをさせた。

評価のために回収した作品は、一旦返却し、夏休み（2ヶ月）後にどれくらい活用したのか、活用にあたって家庭において作品に何らかの手を加えたのかについても尋ね、使用の実態を確認した。

3.3 不用品を活用した作品

(1) 実施時期 2011（平成 23）年 10 月

(2) 学習の展開

第 1 次では自分の用意した縫製品（不用品）を見つめ、特徴をとらえるところから始めた。その上で作品の計画を立てさせた。その際には作品の製作手順や完成予想図も考えさせ、作品製作に対する見通しを十分持たせるようにした。多くの児童が家庭の協力を得て布製品を材料として持参していて、その特徴や形を利用して作品にしようとする姿が見られた。

第 2 次では、製作活動を中心とした。あづま袋の製作でそれぞれが気づいたこと（丈夫さが必要、用途を考えて作成することが必要など）を想起させ見通しを持たせてから製作に入った。

第 3 次でもあづま袋同様、作品を持って写真を撮りあう活動を取り入れた。あづま袋と異なり、それぞれが異なる材料で作品を作っていることもあり、縫製品の作品への活用の仕方に着目する様子が見られた。また、あづま袋との比較を含めワークシートによる振り返りを行った。

なお、材料は全て家庭で準備させる必要があったため、学習に入る 1ヶ月前と 2 週間前に、作品例を提示して材料を用意するように指示をした。10 月下旬を学習時期に選んだのは、衣替えの時期で家庭で不用となる衣服が比較的手に入りやすいと考えたためである。材料を用意することで衣替えに対して関心を持つことが今回の大題材のテーマでもある季節にあうくらしでもあると考えたからでもある。

4. 結果と考察

結果については、仮説 2「衣生活の作品製作では、学習した技能を日常生活に転換するため、関心・意欲を高め、活用できる力が必要なのではないか」にしたがい、①技能について、②関心・意欲、③活用できる力についてみていく。あづま袋、不用品を活用した作品のそれぞれについて検討していくものとする。

4.1 あづま袋

(1) 技能について

1) 製作プロセスの見通し

底だけを縫った作品見本を見せて製作計画を立てさせたところ、教材の項で述べたように、多くがポケットの作成を計画した。その理由は大きくわけて「斜めの部分が縫われていないと物が落ちそう

である」と「ポケットがあると便利である」の 2 つある。いずれも自分が使用することを想定して計画をしている。

製作計画の段階から、88 人中 80 人 (90%) がポケット部分の作成を予定した上で紙模型により内外どちらのポケットにするかを試行している。紙模型は布に見立てた三角形の紙 2 枚をステープラー止めて紙とステープラーで作成させたが実際の縫製においてもできるという見通しを持つことができたようである。

2) 布の性質

紙と布との大きな違いの一つに切り目（裁ち目）の状態がある。紙の裁断面はほつれることがないが、今回使用するバンダナ（織布）では裁断するとほつれてくる。底の部分に使用する対角線は縫い合わせ袋の内側に収まるため大きなほつれは生じないので、かがり縫いの必要はないが、そのほかの部分に切り込みを入れた場合には力加わりほつれが生じる。計画の時点で切り込みを入れることで持ち手を作ろうとした作品（図 2）に対しては、紙と布との違いについて気づかせるようにした。その結果、作品では切り込みを入れず、ひもを縫いつけることにした。

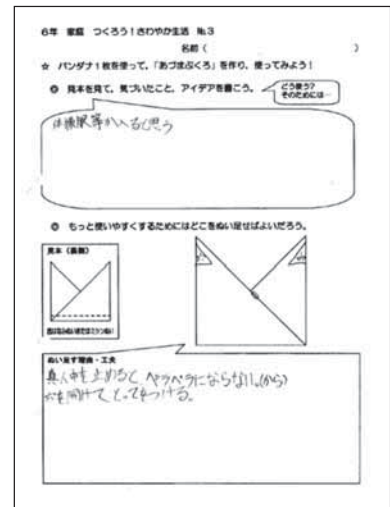


図2 あづま袋の計画(OS 男)

3) 縫製

実際の縫製について見ていく（図3）。具体的な縫製技術について学習プリントに記入された内容を元に分析してみる。底を縫うときには80%以上がミシン縫いを選択している。その理由として「きれいに縫える」「速く縫える」としている者が多い。一方、手縫

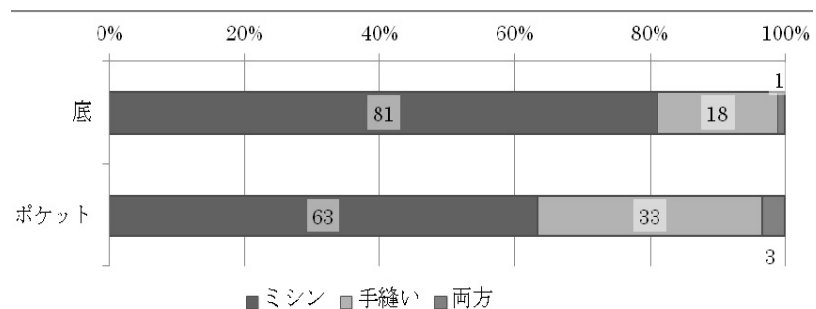


図3 あづま袋の主要部分の縫い方 (N=88)

い（18％）を選択した理由として、「ミシンが苦手」「失敗したときにほどくのが大変」とした者がそれぞれ 3 名ある。また、手縫いでも「丈夫にするために半返し縫い」を選択している者もいる。両方の縫い方で作成した者（1％）は、「ミシンで縫製したが、縫いきれていなかったため」手縫いを行ったとしている。いずれの記述も今までの学習経験から自分の技能にあった縫い方を、与えられた作業時間も考え合わせて選ぶ行動をとっている。

具体的に C 組 (29 名) の作品の縫製についてみていく。

C組では、ミシン縫いで作品を完成させた者が多く、手縫いをした者は、ミシンとの併用を含め底の部分6名、ポケット部分7名である。

縫い方の丈夫さを 3 段階に分けて判定した。基準は、表 3 の通りである。底もポケットも布端まで縫われていること、ミシン縫いの場合は返し縫いが行われていること、手縫いの場合は縫い目が適切な大きさ（5 mm 程度）であることをそれぞれの縫い方の丈夫さの基準とした。

作品の丈夫さの結果は図4のように4割程度である。底の部分は、作品見本による例示があったためか、端まで縫われていないことによる不足は見られなかった。しかし、ミシン縫いにおいて返し縫いがない作品が多く（48%）、ミシンの直線縫いが十分に理解されていないことがわかる。

ポケットの部分は、作品の丈夫さを求めて全ての辺を縫い、ポケットを作らなかった児童（4名、5%）も入ると、88名全員が何らかの縫製を施

している。先に底を縫った場合に、ポケット部分が底に近い部分までミシンで縫えなくなった者がある。底の近くまで縫う必要に気づいた者がミシンと手縫いを併用することで丈夫に仕上げることでできていた。使用目的に応じてポケットの数を増やした例もあった（図5）。また、ポケット口は力が加わりやすい部分であるため、服のポケットでも三角形に縫うなど丈夫な縫い方がされている部分である。自身が着用している制服にもいくつかのポケットがあり、ポケット口の様子を意識させてから活動に入らせたが、半数以上が返し縫いをしなかったり端まで縫えなかったりといった丈夫ではない状態での完成となった。用途が意識されていないことと、ミシンを容易に扱えるまでの技術が身につけていないことが完成度（技能）面に現れたものと考ええる。

底を手縫いし、ポケットは手縫いしている者の理由は「（先に底を縫ったために）ミシンで縫うことができなかった」と「時間的に余裕があり、手縫いをしようと思った」の2つにわかれる。

用いた手縫いのし方は、なみ縫いが最も多く（3名、50%）、最も丈夫な縫い方である本返し縫いを行った者はなかった。ここまでの家庭科学習で手縫いでの作品経験はほとんどないが、今回の袋物製作の底部縫製では、縫い目の丈夫さよりも、なみ縫いを自分の中でよく縫える方法として選んでいると考える。

その中で、本来は裁ち目の糸のほつれを防ぐときに用いる縫い方であるかがり縫いを用いた者がポケット部分で2名（3%）ある。物の出し入れを考えるとポケット部分にかがり縫いをするのは丈夫とは言えない。これらの児童については、基礎縫いである手縫いのそれぞれの目的が十分に理解されていないと考える。

これらの結果から、見通しを持って作業することはできているが、自分が持つ技能の程度を考えて目的に応じた縫い方を選択していることがうかがえる。しかし、手縫いにしてもミシン縫いにしても、経験が少ないので、縫った結果は十分に強度が足りない者が半数を超え、技能の定着が十分とは言えない。

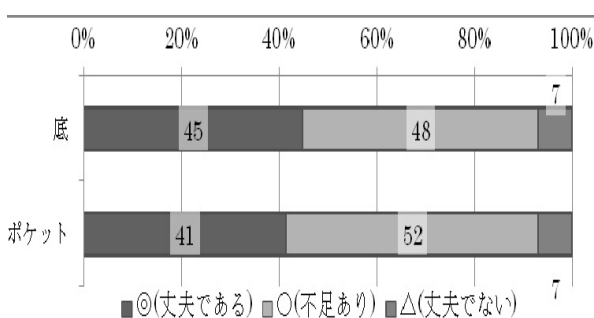


図4 作品の丈夫さ (N=29)

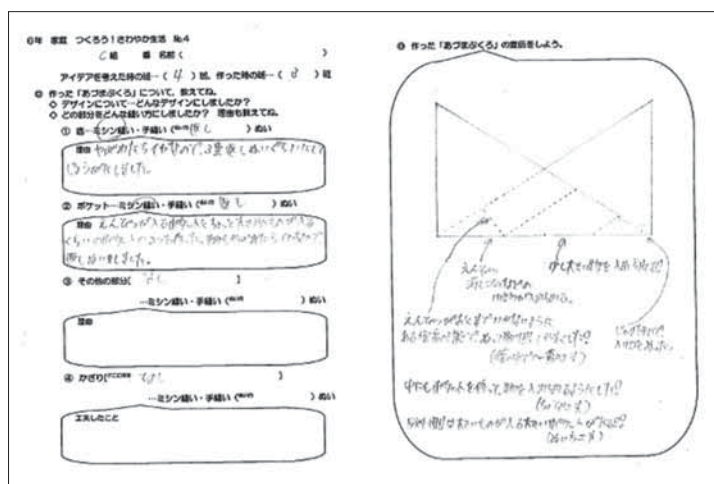


図5 ポケットを追加した作品の紹介カード(YF 男)

(2) 関心・意欲について

1) 製作活動

そのほかにも、ポケット以外の工夫（ボタン、肩紐、持ち手、アップリケなど）を計画している者があった。これらも作品に対する関心や製作に対する意欲の表れととらえられる。

2) ポケットや付属品

活動の中で意欲を高め、計画になかった部位を追加した者もいる。C組では、ポケットに区切りをつけたり持ち手に縫い目を入れたりしてポケットの数を増やす児童が5名あった。鉛筆や定規を入れるための細長いポケットである。いずれも計画段階では予定しておらず、製作中に用途が固まり、追加している。これは関心・意欲が高まったことを示すとともに1つ目のポケットで身につけた技能を活用したと判断することができる。

3) 製作品の手直しや新しい作品作り

作品を返却した際に、学習時間中にできなかった作業について家庭で追加して作業したいとしている者もあった。製作の過程において意欲が高められ、家庭での活用への意識につながったと思われる。

実際に返却後、作業を追加（改造）したのは20%である（図6）。多くは縫製がうまくいかなかったところの補修を行っている。手縫い部分をミシン縫いに変えて丈夫にした例も多い。中には自分の縫い方では丈夫さに欠けるため、全てほどいて作り直した例もあった。

また、家庭で新しいあづま袋を作成した児童が2名あった。1名は返却した翌日から学校生活で毎日使用していた児童である。自分のためにもう1つ作成し、交互に使用する予定をしていた。もう1名は家族へのプレゼントとして作成している。

これらの児童の様子と結果から、今までに身につけた技能を使って作成でき、それらをどのように使用するか自己決定できるように製作過程を考慮した題材は、製作に対する関心・意欲を高めることができると思われる。

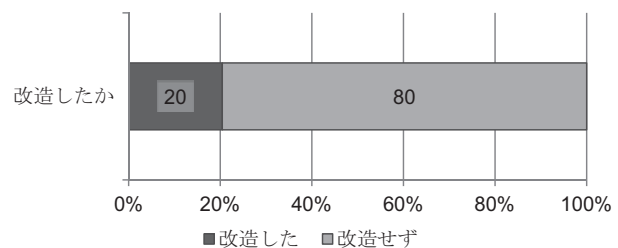


図6 返却後の改造（製作の追加）（N=88）

(3) 活用の機会について

1) 作品の活用

製作したあづま袋の使用状況について述べる（図7）。毎日のように使用している例はなく、全く使用しなかった者が48名（55%）あった。「作品が小さかったため、使いにくかった」という作品の大きさについて触れた者が多かったが、「使う機会（場面）がない」という理由

も多かった。「使おうと思うときにその場になかった」という理由も見られることから、技能と同じく作品の使用目的についても意識的に設定して製作に取り組ませなければ活用されないことがわかる。

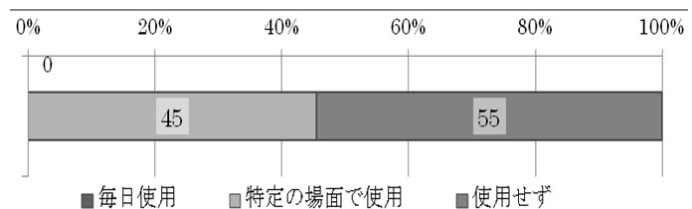


図7 あづま袋の使用状況（N=88）

2) 技能の活用

「あづま袋を作ったことはこれからの生活に役立つか」という問いに対し、「役立たない」とする児童はないため（図 8），製作活動自体は肯定的にとらえていると考える。しかし「あまり役立たない」（36 人，41%）とした中には作ったあづま袋を使用していないことを挙げ、「作っても使わないから」としていたことから、技能の

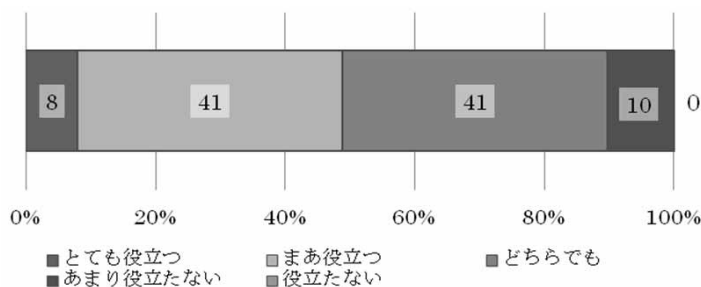


図 8 あづま袋を作ったことはこれからの生活に役立つか (N=88)

活用の機会は意図的に与える必要があることがわかる。一方「とても役立つ」（7 名，8%），「まあ役立つ」（36 名，41%）とした理由で「縫う活動を行うことが今後，他の作品を作ることに生かせる」としたものが多くあった。これらは関心・意欲と合わせ機会があれば自分たちで技能を活用することができるととらえているものと考えられる。

この結果から，今後の技能の活用に向けては，関心・意欲の高い児童においては獲得した技能について活用がなされる可能性があることがわかる。そうでない場合にも機会が作られれば学習したことが活用されるものと考えられる。

4.2 不用品を活用した作品

(1) 技能について

1) 製作プロセスの見直し

多くの児童が布製品を「不用品」として準備してきた。よって，布端の処理などの工程を省くことができ，今までの学習で身につけた技能で作成できる作品が多く計画された。C 組の作品は表 4 に示す。材料には着なくなった洋服やハンカチ・タオル類が使われている。

表 4 C 組の作品(N=29)

作品	人	作品	人
袋物(用途限定なし)	8	ブックカバー	7
箸ケース	2	ペンケース	2
眼鏡入れ	1	カードホルダー	1
リモコン入れ	1	水筒カバー	1
数珠入れ	1	デジカメケース	1
ティッシュボックス	1	はさみ・のり入れ	1
国旗(日の丸)	1	ハンカチ(布巾)	1

また，図 9 のように元の形をうまく活用した計画も多く見ることができた。あづま袋の経験から自分の技能の程度を理解したことも影響していると考えられる。なお，今回は作品の見本は特にはなく，いくつかの袋物を例示して活用の例を示したのみである。

作品の状況については，あづま袋で取り上げた C 組（29 名）を抽出して分析・考察する。

2) 縫製

図 10 に作品に使われた縫い方を示す。あづま袋製作時と比べミシン縫いと手縫いがそれぞれ減少し，両方を使って仕上げた例がやや増えている。これは，使用した素材に厚手が多く，たくさん重ねた場合にミシンで縫うことができなかったり，あづま袋より複雑な工程があったりしたために部分的に手で縫うことを選択した児童があったためである。縫



図 9 不用品を活用した作品の計画(SY 男・抜粋)

い方を具体的に分類した C 組の作品を見ると、一部を手縫いにしたのは 2 名、そのうち 1 名は、リモコン入れとして芯材に牛乳パックを入れた例である。包み込んでから縫製をしたために、ミシン縫いが不可能となり、一部を手作業で行ったものである。全てを手縫いしたのは 6 名である。そのうち 1 名は、あづま袋でも全てを手縫いしていた。理由を「ミシンが不得手」としている。自分の技能を見つめて製作に臨んでいるといえる。

また、手縫いで使われた技法はほとんどがなみ縫いである。主な部分や丈夫にしたい部分はミシンを使用するようにしていたと見られる。かがり縫いの 1 名（14%）は、2 枚の布を縫い合わせて表に返した部分をふさぐためにかがり縫いを使用したもので、かがり縫いの用途を理解して使用していると考えられる。

これらから、技能については活用の機会を重ねることで、目的に応じた方法を自分で選択できるようになることがわかる。

作品の丈夫さについてみていく。対象は C 組の作品（29 名）である。あづま袋同様、3 段階に分けて判定した。判定基準は表 5 の通りである。結果は図 11 の通りである。

丈夫であると判定できた作品は 19 名（66%）であった。布製品の元の縫製を利用している部分もあるが、新たに縫い足した部分も、実際に使用する

ことを考えて返し縫いや重ね縫いなどを意識して作業されたものが多い。あづま袋で十分に縫いきれなかった、使用には縫い目に不安があったという経験が今回の作業を丁寧にしたものとする。丈夫さに不足があると判定した 10 名（34%）についても、あづま袋でポケット口が手前で縫い止っていたというような大きな補修を必要とする状態ではなく、縫い目が少し大きめであったりボタンのつけ方が弱かったりといったものであった。ここでも丈夫さは意識されていたものと考えられる。

あづま袋の丈夫さと比較対応した結果を示す（表 6）。不用品を使った作品で丈夫でない基準に分類される物はなかった。あづま袋の時より今回の不用品を使った作品作りの方が丈夫さにおい

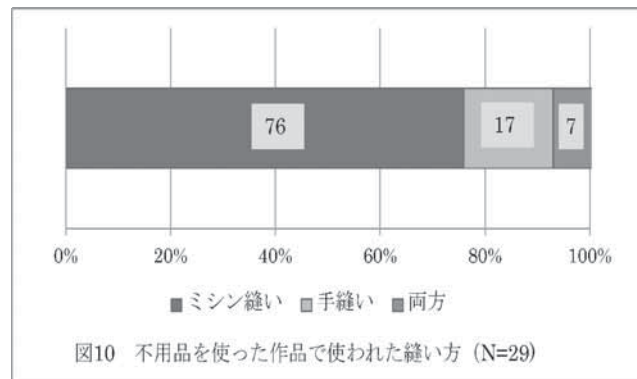


表 5 丈夫さの判定基準

	ミシン縫い	手縫い
◎(丈夫である)	返し縫いが行われている。 実生活で使用できそうである。	縫い目が 5 mm 程度である。 実生活で使用できそうである。
○(不足あり)	返し縫いがない、縫い代が残っているなど 使用時には補修が必要である	縫い目が大きい、縫い代が残っているなど 使用時には補修が必要である
△(丈夫でない)	針目が途中で切れるなど、日常の使用には向かない。	縫い目が大きすぎる(2 cm 以上)など、日常の使用には向かない。

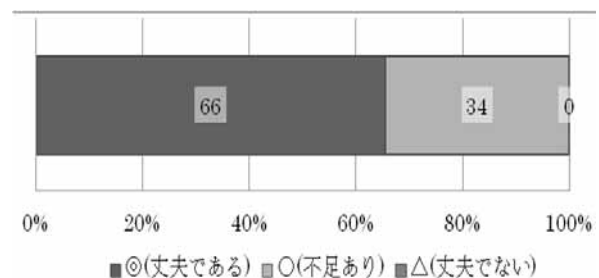


図 11 不用品を使った作品の丈夫さ (N=29)

表 6 あづま袋と不用品を使った作品の丈夫さ

		あづま袋			合計(%)
		丈夫	不足あり	丈夫でない	
不用品	丈夫	9(31)	9(31)	1(3)	19(66)
	不足あり	0(0)	9(31)	1(3)	10(34)
	丈夫でない	0(0)	0(0)	0(0)	0(0.0)
合計(%)		9(31)	18(62)	2(7)	29(100)

て向上している者が 11 名（38%）で、どちらも丈夫に製作できている者が 9 名（31%）と丈夫に作品を作れるようになっている。

これらの結果から、技能の定着や利用には作品に対する見通しと技能を使った経験が影響すると考えることができる。

（2）関心・意欲について

1) 材料の準備

学習に入る 1ヶ月前と 2週間前に家庭科通信と実物によって作品例を提示し、材料を用意するように指示をした。図 12 で材料の入手方法を示す。多くは家族（保護者）から材料の提供を受けている（52 名）。しかし、自分で自分の持ち物を見直し、材料として持参した者もあった（31 名）。（ただし、この場合も保護者の了承を得てから持参することを指示している。）なお、家庭の事情を考慮して、材料の準備については強制せず、準備ができなかった児童には学校よりフェルトを渡し、製作させた。持参できず、学校で準備したフェルトを使用したのは 3 名である。家庭の協力も大きい。児童が何らかの形で家庭で用意するということは、製作への関心・意欲を高めたといえる。

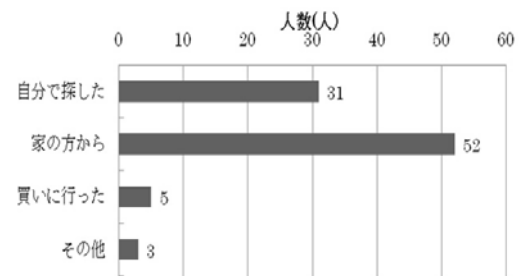


図 12 材料の入手方法（複数回答）（N=88）

2) 作品づくり

作品のアイデア（構想）からも関心・意欲が図れると考えた。授業での課題として受け止め、受身的に活動を進めた場合、自発的なアイデアが出せず何らかの援助を求めるのではないかと考えたからである。作品のアイデアをどうしたか、について「自分で考えた」「家の方に尋ねた」「本などで調べた」「その他」の 4 項目に分けて尋ねた。87% にあたる 77 名が自分で何らかのアイデアを出して作品に取り組んでいる。何かからヒントを得ながらも自分で考えて作品に取り組んだということは、題材に対する関心・意欲があったものと考えられる。その他（2 名）のうち 1 名は、現在持っているものを手本として新たに同じものを作成したいとした者である。見通しを持って活動に取り組んだ例である。

3) 姿勢

さらに製作の過程における態度からも関心・意欲をとらえていく。作品の作り方をどのように入手したかについても作品のアイデアと同じ選択項目で尋ねた。ここでもアイデア同様、多くが「自分で」考えている（70 名）。「家の方」は 8 名、「本など」は 9 名であった。「その他」（4 名）の内訳には「先生（指導者）」としたものと「既存の作品を見た」としたものとがあった。アイデアは持てたものの縫製の方法がわからなかったり自分の持つ技能をどのように活用せばよいかわからなかったりしたため、本や家の方（保護者）、指導者に頼ったものと考えられる。作品に対する関心・意欲は高いと考える。

最後に製作中の周囲との関わりからも関心・意欲が見えるのではないかと考えた。あづま袋の作成においては、他の児童の作品を見て自分の作品に工夫を加える姿が見られた。友達とかかわりを持つことによって製作に対する関心・意欲が高まり、作品の完成度につながるものと考えられる。図 13 に見られるように今回の作品においても、作り方を教えあったり製作中の作品を見せ合ったりする姿が多く見られた。45 名が友達と相談して作品を製作し、29 名が先生に相談をしている。より良いものを作り

上げたいという意欲が相談という行動を起こしたと考える。

これらの結果から、材料の選定や作品のアイデア、作り方の見通しに自己決定や自己選択ができる場面が多く設けられたり製作時に友達との交流がもてたりする題材の場合、学習者の関心は高くなり、製作に対する意欲を高めることができるものと考えられる。今回は特に家庭での不用品を活用し、新しい用途を持たせるという工夫を加える題材であったことがさらに関心・意欲を高めたものと思われる。

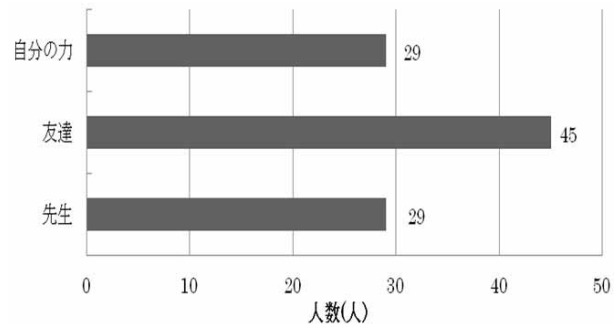


図13 製作の際に誰かと相談をしたか（複数回答）
N=88

(3) 活用の機会について

1) 不用品の活用

あづま袋と異なり、学習者個々に材料を用意させ、製作するものを決定している。よって、用いる技能も作品によって異なってくる。その際にどのような技能を使用するかは、個人が用意した材料の状態をどのように活用するかによっても変わってくる。

図14は、元の形やデザイン（柄など）を活用した作品となっているかどうかについてC組（29名）の作品から判断したものである。今回は、「不用品から作品を発想する」ことをテーマとしていたが、反対に作品をイメージした上で不用品を探した例があった。それを「その他の発想」（17%）とした。この例には、「気に入ったブックカバーがないので不用品から気に入ったデザインの布を探してブックカバーにする」「地域で所属する野球チームから外国へ遠征するときに国旗を持参したい。そのための国旗を作成する」などが挙げられる。発想の順は指定したものと逆ではあるがいずれも製作に対する意欲と材料に対する関心は持っている。また、今回の仮説である日常生活で必要とするものに技能を活用する機会という目的は大きく達成していると考えられる。

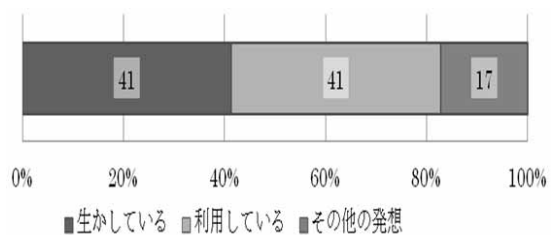


図14 元の形を生かした作品の発想をしているか
(N=29)

元の形をよく活用した作品の例に、図15の眼鏡ケースがある。この作品は、2種類の布を使って製作されている。巾着部分は角を丸く切り落とした部分が縫製された布地を利用し、第5学年で製作したナップザックを応用してひも通しを作っている。中央の顔の部分は、別の布にプリントされた顔を切り抜き、なみ縫いでアププリケしている。なお、この児童はあづま袋で底の部分をかがり縫いし、「丈夫」と自己評価していた児童である。前はポケット部分をミシン縫いしていたが今回は全てをなみ縫いで手縫いしている。縫い目も少し大きめではあるが針目がそろっており、あづま袋より丈夫になり技能が身についたことがわかる。技能の活用の機会が定着と適切な技能の活用を促すようになったと考える。



図15 眼鏡ケース(OA女)

2) 技能の活用

最後にあづま袋との比較により、経験を重ねることが技能の活用に作用するかどうかについて見てみる。

技能の活用という視点から、あづま袋の経験が今回の活動に役立ったと感じているかどうかを尋ねた(図 16)。「とても役立った」が 25 名(28%),「役立った」が 47 名(53%)ある。同じ作品(あづま袋)を作った者はいなかったが、図 8 の「あづま袋の役立ち感」で理由を「今後の作品に生かせる」としていた者は「とても役立つ」(8%),「役立つ」(41%)と半数以下だったが、実際に機会を作ったときに「役立つ」とする者が多かったこ

とから作品の製作においてすでにある製品を加工することは、作品製作への関心・意欲を強めたり、今までに身につけた技能を用途に応じて活用しようとするのがここで実証されたのではないかと考える。

3) 自己決定

図 17 では「楽しかった」という表現であづま袋との比較を行った。「とても楽しかった」が 43 名(48%)「楽しかった」が 44 名(50%)ある。図 18 でその理由を尋ねた。「何を作るか決められた」(60 名, 68%),「自分で材料を用意した」(54 名, 61%)という自己決定・自己選択の要素について指摘する項目が上位を占めた。次いで高かったのは「作ったものが使える」(49 名, 56%)である。あづま袋より自分で大きさや用途が決められるため、「使える」物を作ろうという意欲を高めたり使おうという機会を作ろうとしたりしているものと考えられる。

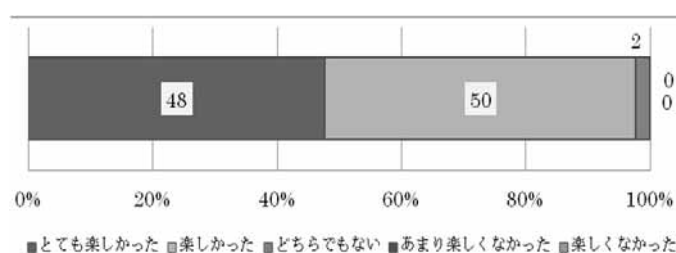
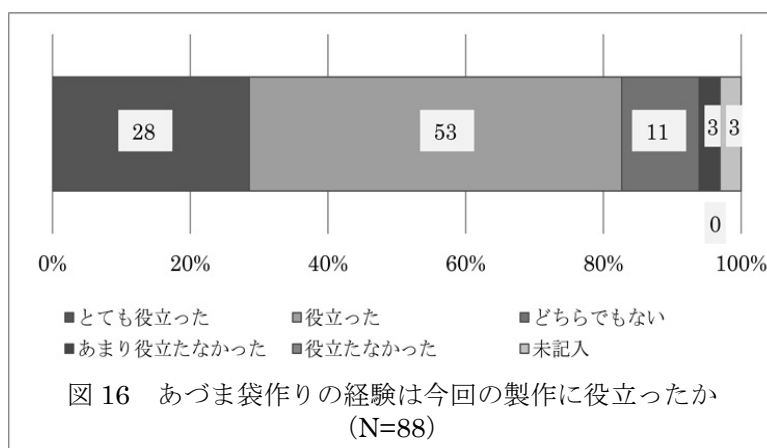


図 17 作品作りはあづま袋と比べて楽しかったか (N=88)

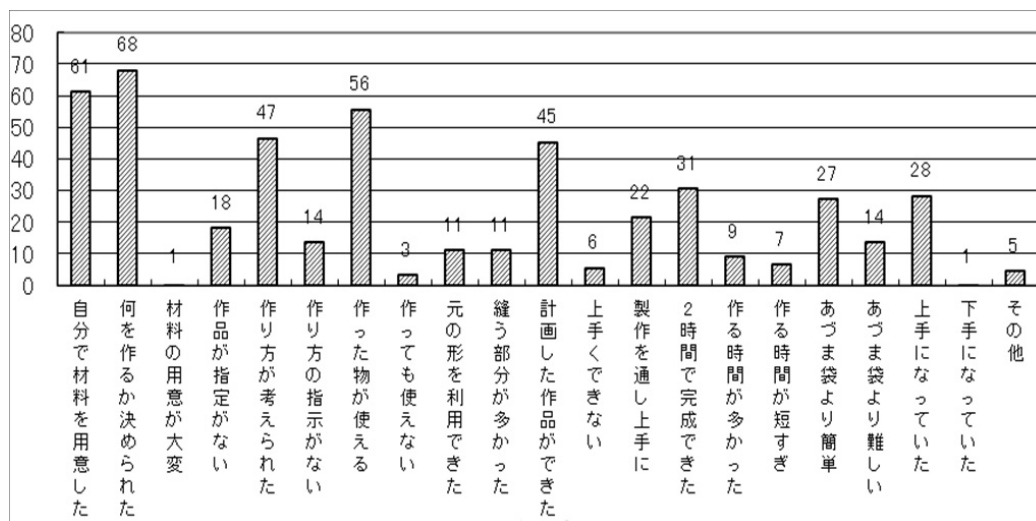


図 18 あづま袋とちがって楽しいと感じられたところ (%・複数回答) N=88

5. 本稿のまとめ

本研究においては、学習指導要領や子どもたちの生活や技能の実態の変化を考えて仮説を2つ立てた。そのうち、本稿では2つ目の仮説について2つの授業実践を通して検証してきた。

まず、前稿の結果を受けて、子どもたちが関心・意欲を保ち、家庭科学習で身につけた技能を活用して製作することのできる製作題材について検討し、2回の授業実践を行った。

1回目に製作した「あづま袋」では、指導者が主な製作手順を提示し、全員で同じ作品を製作させた。縫い方やポケット・装飾などは自己決定ができるようにした。その結果、製作に対する関心・意欲は持たせることができるものの、製作に必要な技能が十分に身につけていなかったり、うまく活用させることができなかつたりして作品としては不十分な場合が見られた。また、「作らされた」という意識も働いたためか、その後の使用状況も低く、作品としても十分に活用されていないことがわかった。

そこで2回目には「不用品を活用した作品」という材料・製作物・製作手順など多くの要素で自己選択・自己決定できる題材を設定した。その結果、製作に対する関心・意欲を高めることがわかった。また、あづま袋を製作したときに比べ、関心・意欲だけでなく技能も向上した。これは製作活動を重ねることで技能の定着がはかれ、技能の活用機会が設定される必要があることを示している。また、不用品の活用は、環境教育や消費者教育の面からも取り上げることができ、製作題材に必要な要素も満たしているといえる。

これらから、「学習した技能を日常生活の中で転換」するためには、製作の活動を通した各学習場面で「関心・意欲を高め、活用する力を高める」ことが必要であることがわかった。そのため、製作題材にどのような要素を盛り込むか検討した上で、基礎から応用へと発展させる指導過程に組み立てることが必要となる。

本研究から見出された結論を受けて、小学校家庭科学習において日常生活での技能の活用を目指すためには、次のような指導過程の工夫が必要であると考ええる。

まず、学習場面において製作の機会を作ることである。それにより技能の定着やそのほかの場面において活用しようという意欲が高まる。指導時数の減少により十分な時間や回数の確保は難しくなっている。しかし、題材全体を製作にあてるのではなく、不用品の活用では「くふうしよう！季節に合うくらし」の一部として作品製作を取り入れたように、大題材の一部として短時間での活動を位置づけることで回数を重ねることができると考える。

また、製作の場面や材料において自己決定・自己選択の要素を増やすことである。自己決定・自己選択をさせるためには、それまでの学習で材料や製作技術に対する知識理解や技能が必要となる。技能は製作を行うことで、定着し、活用されるようになるものであるが、ある程度の技能が身についた状態がないと、作品の完成度が低くなり、作品の活用にも活用されなくなる。

さらに、活用する機会を作り出すことである。この「活用の機会」とは、製作技術の活用と作品の日常生活での活用の2つを指す。まず、製作技術の活用については、前述のように製作の機会を作り、縫い方を自己選択させる機会を作り出すことで目的に合った技術を活用したり技能を定着させたりすることができる。作品の日常生活における活用では、学校行事などで作品を活用する場面を作り出すことで活用の場면을例示することが考えられる。これは、従来から取り入れられている方法である。しかし、それだけでは受身的になるため、子どもたちが自分で活用の場面を考え、活用しようという意欲を持たせることが必要であると考ええる。

6. おわりに

本研究では前稿、本稿を通し2つの仮説について調査や授業実践を通して検証してきた。

前稿では、家庭科について小学生や大学生に対する調査から、教科で学習した内容の知識は身につけていることがわかった。しかし、関心・意欲は高いものの、技能およびそれを活用する機会が十分でないために、学習の成果が日常生活へ十分に転換されず、活用されていないことが示され、1つ目の仮説で述べた「学習の成果が日常生活へ転換される」ための要素として、技能や技能を使う場面、技能や作品を活用する場面や機会が意図的に作られる必要があるという結論を得ることができた。

本稿では、2つ目の仮説である「学習した技能を日常生活の中で転換するため、特に衣生活の作品製作では、子どもたちの関心・意欲を高め、活用する力を高める工夫が必要である」ことについて、授業実践から明らかにしようと取り組んだ。自己決定や自己選択の多い題材の製作を行うことで関心・意欲が高まり、既習の技術を活用して製作に取り組むことが明らかになったことから、製作方法やその中で使われる技能を十分吟味した題材を設定し、利用する材料等も含め、子どもたちの自己選択の余地を組み込むことで、より子どもたちの技能の定着や活用に役立つのではないかと推測できた。

また、技能が十分に身につけていないために作品の完成度が低くなる場合があるという課題については、製作題材を十分検討し、学習者が確実に身につけるべき項目を学習者自身が的確に選択して使用できていくような学習過程の工夫も必要である。

今後もさらに、学習者の技能の定着と日常生活への技能の活用が効果的な製作題材の検討と実践をしていかねばならないものとする。

謝辞

本研究を行うにあたり、授業実践に協力いただきました、平成23年度京都教育大学附属京都小中学校6年生の児童の皆様に御礼を申し上げます。

註

- 1) 平野江美，榊原典子（2012）「小学校家庭科における生活技能をめぐる課題―日常生活での技能の活用を目指す指導過程（1）―」『京都教育大学紀要』第121号 pp.67-81
- 2) 衣生活の製作に関する教育的意義の見直しについて、例えば、鈴木明子（2009）の「家庭科教育における「布を用いた製作」の教育的意義の検討」（『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部 第58号 pp.301-307）がある。
- 3) 子どもの学びの実態については、例えば、竹吉昭人，多々納道子（2005）の「小学校家庭科における布を用いた製作活動の学びの実態」（『島根大学教育臨床総合研究紀要』第4号 pp.131-141）などがある。
- 4) 製作教材については、領域を統合した教材としての製作学習の意義を明らかにした谷口明子，平嶋憲子，菱田道代，鈴木洋子（2002）の報告（「小学校家庭科における実践的な態度を育てる授業

「お弁当づくり」の開発」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』Vol.11 pp.201-205) や基礎的知識を習得しつつ短時間で製作できる作品を検討した加藤(2004)の報告(「短時間で仕上がる被服教材Ⅰー腕カバーー」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第7号 pp.205-210) など多くの実践報告がある。